

氏 名	和 賀 志 郎 わ が し ろう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 206 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 40 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	医 学 研 究 科 外 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	Medulloblastoma と Cerebellar Sarcoma 組織学的ならびに顕微鏡的検討

論文調査委員 (主 査) 教授 荒木千里 教授 木村忠司 教授 伊藤鉄夫

論 文 内 容 の 要 旨

1941年から1963年までの間に、京都大学外科学第一講座において手術または剖検によって得られ、組織学的に medulloblastoma と診断された29例および cerebellar sarcoma と診断された13例について、組織学的再検討を行い、更にそれらのうち medulloblastoma の8例および cerebellar sarcoma の1例については電子顕微鏡的にも観察し、次の結果を得た。

1) Medulloblastoma 群と cerebellar sarcoma 群との間には、組織学的に本質的差異を認めず両者の間に移行型が存在し、電子顕微鏡的にも両群の腫瘍細胞は全く同一と認めた。

2) Sarcoma 群では、組織学的に結合組織線維に富むが、電子顕微鏡的に腫瘍細胞自身と結合組織線維とはとくに密接な関係がなく膠原線維は腫瘍細胞の細胞間隙および血管周囲腔に認められるのみであった。

3) 両群の腫瘍細胞が脳軟膜に浸潤する部では、一般に結合組織の増殖を伴うが、結合組織の特別の構造を示さないものから、cord-like arrangement あるいは glomerular pattern 等の構造を示して cerebellar sarcoma と診断されるに至るものまで、いろいろの段階があることを認めた。これらのことから sarcoma 群の結合組織は腫瘍細胞の脳軟膜浸潤に対する反応性増殖によるものと考えた。

4) 同一腫瘍でありながら、小脳半球表面の硬度が大である部では、組織学的に cerebellar sarcoma の特徴を示し、それに連続した小脳深部の軟い部では medulloblastoma の特徴を示し、その中間部では両群の移行を示した4例を観察し、うち1例は電子顕微鏡的にも検討し、両者の腫瘍細胞が全く同一であることを認めた。

5) 小脳虫部に腫瘍があり、小脳半球表面にも腫瘍塊を認めた2例では、組織学的に虫部は medulloblastoma の組織像を示し、小脳半球部では cerebellar sarcoma の組織像を示した。

6) 腫瘍の同在、発現年齢および性別に絶対的差異を認めなかった。

以上の諸点から Foerster and Gagel より最初に記載され、その後多くの人々によって認められて

来ているいわゆる cerebellar sarcoma は medulloblastoma と本質的に同一であり、結合織の増殖により特別の構造をとるに至った一つの variant であると考ええる。

論文審査の結果の要旨

京大外科における medulloblastoma 29例, Cerebellar Sarcoma 13例の組織学的再検討と、さらにそのうち Medulloblastoma 8例と Cerebellar Sarcoma 1例の電顕的観察を行なった。

1) 両群の間に組織学上本質的の差を認めず、両者の間に移行型が存在し、電顕的にも両群の腫瘍細胞はまったく同一と認めた。

2) 肉腫群における結合織の特異な増殖型式は Medulloblastoma でもある程度見られるもので、腫瘍細胞に対する軟脳膜の反応性増殖と考えられるものである。

3) 腫瘍の局在、発現年齢および性別にも絶対的の差はない。

以上およびその他の所見をもあわせ考えて、Cerebellar Sarcoma といわれているものは Medulloblastoma と本質的に同一であり、結合織の増殖の程度がとくに特別の構造をとるにいたった Medulloblastoma の一つの variant であると結論される。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。